

1950-1980年代の失踪表象と親密圏の変容

——「家出」と「蒸発」の雑誌記事分析を中心に——

中森 弘樹

本稿の課題は、「失踪」、つまり「人が家族や共同体から消え去り、長期的に連絡が取れずに所在も不明な状態が継続すること」が戦後から高度経済成長期にかけてどのように語られてきたのかを明らかにすることである。その目的は、既存の紐帯からの解放を肯定的に捉える言説の変容を、歴史社会的に考察することにある。上記の課題に応えるため、1950年代から1980年代の「失踪」に関わる雑誌記事を収集し、言説の分析を行った。

分析の結果、1950年代には少年少女の農村から東京への「家出」が、1970年代には成人の「蒸発」が、それぞれの時期の「失踪」の主要な論点として語られていたことが明らかになった。前者の言説では農村の閉塞的で貧しい生活からの自由が、後者の言説では戦後に形成された新しい家族体制からの自由が、「失踪」の目的として語られていた。

1 はじめに

1-1 問題設定

近年、個人の孤独な生と死が問題として語られる機会が増えている。例えば、誰にも看取られずに死ぬことを意味する「孤独死」に対する不安は、1995年の阪神・淡路大震災以降は常にマスメディアで取り上げられ続けてきた。この「孤独死」が、地縁・社縁・血縁といったかつての人間関係の崩壊によって増加していることを指摘した「無縁社会」の言説が、2010年に流行語となったことは未だに記憶に新しい¹。また、東日本大震災を経験した2011年には、家族や共同体の「絆」の重要性がマスメディアで盛んに語られ、「絆」は日本漢字能力検定協会によって2011年の世相を示す「今年の漢字」に選ばれている。これらの言説に共通しているのは、家族や共同体と個人との関係が途切れる

という事態を否定的に捉えているという点であろう。その際に、個人は家族や共同体から受動的に排除されるものとして扱われている。

これらの言説の流行の背景に、U・ベックら(Beck and Beck-Gernsheim 2002)の指摘する「個人化」の進展と、それにとまなう人間関係の変化があることは明白であろう。特に後期近代の社会では、個人は伝統的な共同体や紐帯から解放され、より多くの自己選択の機会を得る一方で、自己選択の帰結としての多大なリスクにさらされることになる。この「個人化」の傾向は、個人と個人が取り結ぶ人間関係にも見出すことができる。つまり、既存の親族関係や、職場や学校などのコミュニティの拘束が弱まり、個人と個人が自らの選択に基づいて関係を取り結ぶようになる一方で、そのようにして選択された人間関係は互いの意思次第で常に解消されるリスクも孕むことになる。石田光則

(2011)は、先に見た「無縁社会」の言説の流行には、このような後期近代以降の不安定な人間関係に対する我々の不安が関わっていることを指摘している。

しかし、「無縁社会」の言説が否定的に捉えた人間関係の変化は、上記のように「個人化」にともなう選択的な関係性の拡大と捉えると、かならずしも否定的な側面ばかりを孕んでいるわけではないことが分かる。例えば網野善彦(1973)は、近世以前の「無縁」という言葉には、主従関係や親族関係との関係が切れることで得られる「自由」の意味が含まれていたという点を指摘している。そして、このような捉え方は近世以前の日本社会でのみ見られるわけではない。石田(2011)や島田裕巳(2011)によれば、戦後から高度経済成長期にかけての時代に「無縁」が肯定的に評価された時期があり、その際には戦前頃まで日本の村落や家制度のなかに存在したとされる紐帯からの解放が歓迎の意味を込めて語られたという。しかし、「個人化」を否定的に捉える近年の言説には焦点が当てられることが多い一方で、既存の紐帯からの解放を肯定的に捉えるかつての言説は、歴史社会学的に十分な研究がなされてきたとは言い難い²。そして、この言説の歴史を明らかにするためには、冒頭で見たような個人が家族や共同体から受動的に排除されるという言説のみならず、個人が家族や共同体から能動的に離脱することを扱う言説にも焦点を当てる必要があるのではないだろうか。

そこで本稿では、「失踪」にまつわる戦後から1980年代にかけての言説に着目する。本稿における「失踪」とは、「人が家族や共同体から消え去り、長期的に連絡が取れず、所在も不明な状態が継続すること」を指している³。「失踪」は、近世以前から家族や共同体で起こり

るものとして認知されていた事態であるが、戦後の社会でも様々な意味を付与され、ときに奇異の眼差しを集めながらマスメディアの報道の対象となってきた⁴。これらの戦後の失踪に関するメディア表象からは、個人が家族や共同体から離脱することがかつてどのような意味を有していたのか、またその際に志向されていた自由とは何だったのか——それは何からの自由と、何への自由を意味していたのか——、これらの変遷を読み解くことができるのではないだろうか。

1-2 理論的背景

上記の問題意識に基づいて「失踪」の言説の変遷を分析する際には、同時に家族をはじめとした親密圏の変容についても合わせて考察されるべきであろう。というのも、既存の紐帯からの解放を志向する言説においては、時代ごとに「既存の紐帯」が何であるかに応じて、その言説の内容も異なってくるのが想定されるからである。そして、当時の親密圏のあり方に応じて、解放が志向される既存の紐帯もまた変化してきたことが見込まれる。

なお、本稿では齊藤純一(2000)の定義を参照しつつ、「親密圏」を「具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって維持される圏域」の意味で用いる。よって、本稿における「親密圏」は、必ずしも血縁関係および婚姻関係に基づく家族に限るものではない。本稿で、そのような意味での「家族」ではなく「親密圏」の概念を分析に用いるのは、前節で述べた人間関係の変化を考慮に入れるためである。「個人化」の進展によって、人間関係は以前よりも選択的なものとなる傾向がある。このように社会規範や経済的要因などの外的条件によらず、個人が自らの選択で取り結ぶ関係性を、A・ギデ

ンズ (Giddens 1991 = 2005) は「純粋な関係」と呼んでいた。「純粋な関係」に上記の「家族」以外の関係が含まれることは明らかであるが、「親密圏」の概念を用いることで、そのような「家族」以外の親密な関係が重要性を増していく過程も分析できることが見込まれる。

では、上記の「個人化」による親密圏の変容は、人間関係についての言説にどのような影響を与えてきたのだろうか。石田によれば、「個人化」による親密圏の変容は「純粋な関係を個々人の自己実現や個性の発揮と結びつける『解放』の言説と、純粋な関係を人間関係の希薄化と結びつける『剥奪』の言説」(石田 2011: 34)の二つの言説を生み出したという。「個人化」に対して、それを否定する言説と肯定する言説の二つの言説が生じてきたことは前節でも述べた通りであった。ただし、実際にそれらの言説の歴史を分析するにあたっては、時代に応じた「個人化」の進展の度合いや親密圏のあり方も合わせて考慮されるべきであろう。先に述べたように、それらの条件によって、同じ「解放」の言説であっても、その内容は大きく異なる可能性があるからである。「失踪」の言説の変遷に、具体的にどのような親密圏の変容が大きく関わっていたのかについては、3章で述べることにしたい。

1-3 分析の対象としての「失踪」

本節では、「失踪」の言説について分析を行う前に、「失踪」についての基本的知見について簡単に確認しておこう。

まずは、「失踪」が実際にどの程度の頻度で生じているのかを、「行方不明者の概要」のデータを用いて確認しておく。「行方不明者の概要」は、年ごとの警察に出された行方不明者届出書の件数と、行方不明者の発見数が記録されてい

る資料である。2012年に発行された「行方不明者の概要」である警察庁生活安全局生活安全企画課(2012)には、2012年までの各年の行方不明者届出書受理件数が記されており、記録が残る1956年から常に8万件以上が行方不明者として記録されていることが分かる。また同資料には年間の「所在確認数」も記録されているが、その件数は届出の受理件数に数千件程度及んでいない。これは同時に、日本国内で短期的には発見されない行方不明者が毎年数千人規模で生じてきたことを意味している。本稿が対象とするのは、そのような短期的には解決されない行方不明、つまり「失踪」に対する言説である。

次に、「失踪」が社会学でどのように扱われてきたのかについて、簡単に触れておこう。まずは、社会病理学の分野で主に1970年代に行われた「家出」の研究について見ておきたい。「家出」の研究では、「家出」は「家族成員が自己の所属する家族の日常生活から一時的にあるいは永続的に離脱する行為」(米川 1978: 99)とされている。よって、長期的もしくは永続的な「家出」は、本稿が着目する「失踪」の概念に含まれる⁵。ただし、「家出」の研究は「家出」の原因を統計的に分析することに主眼が置かれており、それゆえ分析の対象は原因の判別が容易である、一時的な「家出」が中心となっている。このような「家出」の研究に対して、星野周弘(1973)・井上忠司(1978)・米川茂信(1978)では「蒸発」の概念が紹介されている。「蒸発」は、「家出」の中でも残された家族にとって原因が全く不明であり、しかも元の家族や共同体との関係が途絶えてしまうがゆえに解決が困難な事態を指している。よって、「蒸発」も本稿における「失踪」の概念に含まれる⁶。なお、上記の研究では「蒸発」の原因の分析が試みら

れているが、その原因を知る本人が消えてしまうという「蒸発」の性質上、分析は困難を極めている。そして、「蒸発」という言葉が一般的ではなくなるにつれて、「蒸発」の研究も行われなくなったようである。

以上より、「失踪」に関するかつての研究では、その実態の解明は十分にはなされていなかったことが分かる。しかし、「失踪」はそのように実態が不明瞭であるがゆえに、マスメディアでは様々な語り口で取り上げられてきた。実際に、星野（1978）によれば「蒸発」はマスメディア由来の用語であり、また井上（1978）も「蒸発」がマスメディアで「センセーショナルな」扱いを受けてきた社会問題であると指摘している。これらの記述から、少なくとも1970年代には「失踪」が「蒸発」としてマスメディアで盛んに取り上げられてきたことが分かる。そして、本稿の課題は「失踪」の実態を分析することではなく、ブラックボックスであるともいえる「失踪」にどのような意味が与えられてきたのかを明らかにすることにある。以下では、上記の「蒸発」を含めた「失踪」にまつわる言説が雑誌上でどのように語られていたのかを詳細に見ていくことにしよう。

2 雑誌記事分析

2-1 研究の方法とデータの概要

上記の課題に応えるために、本稿では1950年代から1980年代までの「失踪」に関する雑誌記事の分析を行う⁷。記事の収集方法は、下記の通りである。

まず、記事の入手可能性の観点から、収集するのは一般商業誌の図書館である大宅壮一文庫に所蔵されている雑誌記事とした。次に、大宅壮一文庫に所蔵されている雑誌記事の索

引である『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録<1888-1985> 件名編』、『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録<1985-1987> 件名編』、『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録<1988-1995> 件名編』、および『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録<1888-1987> 追補 人名編・件名編』を用いて雑誌記事を検索した。目録には、雑誌記事の見出しが項目別に掲載されている。項目は大項目、中項目、小項目の順番に階層化されているが、大項目「世相」・中項目「世相風俗いろいろ」の中に小項目「謎の行方不明、失踪」と「家出」が存在する。「失踪」に関する雑誌記事も、多くは「謎の行方不明、失踪」もしくは「家出」のいずれかの項目に分類されていることが想定される。上記の二つの小項目に分類された記事から、以下の条件で記事を収集した。①個人が家族や共同体から長期間離脱する事態について扱った記事を収集した。「失踪」に関する記事に限定するために、数日や一カ月で家族や集団の元に帰還する短期的な「家出」のみを扱った記事は収集の対象から除外した。②収集するのは1950年から1989年までの40年間の記事とした。③複数の「失踪」の事例を取り上げ、取り上げた事例を社会的な問題として論評する記事のみを収集した。ある単独の「失踪」の事例のみを扱っている事件報道の記事は収集の対象から除外した。以上の条件の下で雑誌記事を収集した結果、38種類の雑誌から、140件の記事が収集された⁸。なお、記事の収集期間を上記のように限定しているのは、既存の紐帯からの開放が肯定される傾向にあった時期として、石田（2011）では1970年代から1980年代が、島田では昭和30年代から1970年代までが挙げられていたからである。

雑誌記事の記述の形式についても確認しておこう。「失踪」の記事の長さは10行程度のも

のから 10 ページにわたる特集まで多岐に渡っている。事例の記述は、関係者への取材を元にしたとされる内容が中心であった。また、「失踪」を記述する際の視点としては、「失踪する者」に焦点を当てるもの、「失踪される者」に焦点を当てるもの、あるいはその両方を主題とするものの三パターンが存在した。以下では、このような「失踪」を取り上げる雑誌記事の変遷について、「どのような『失踪』を取り上げているのか」「取り上げた『失踪』について、記事の執筆者がどのように論評していたのか」を中心に見ていくことにしたい。

2-2 「失踪」の言説の戦後史

2-2-1 1950年代の「家出」言説

収集された記事の中で、1950年代に発行された記事の多くは、10代の少年少女たちの農村から東京への「家出」を主題としたものであった。なかでも典型的に見られたのは、「家出娘はどこへ行く 都会に巢食う狼の群、上野地下道へ一直線」(『週刊朝日』1950.3.5)や「上野・ねらわれる東北の風来娘」(『週刊読売』1953.11.29)などの見出しの記事のように、東京の上野駅における「家出娘」について扱った記事である。これらの記事では、東北の実家から家出した10代半ばの少女が、東京の上野駅で「狼」によって誑かされ、最終的に性労働者になるという共通の筋道の語りを展開される。上記の記事における「狼」とは、少女たちを性産業に誘い込む男性を指している。また、記事の舞台が上野駅となっているのは、少女たちが東北地方から上京する際の列車の終着駅が、上野駅であったからである。記事では、このような「家出娘」たちの「転落」が、問題として扱われていた。

では、少女たちの「家出」は、記事中ではど

のように論評されていたのだろうか。上野駅の「家出娘」について扱った雑誌記事では、「家出」の目的として東京での就業が、さらにその背景として若者の都会への憧れが共通して挙げられていた。この若者の都会への憧れは、別の記事では「マス・コミが生んだ“東京病”」(『週刊大衆』1958.7.21)であると指摘され、その原因とされているマスメディアが批判の対象となっている。実際に、「家出娘はなぜふえる? 流行歌にも登場」(『週刊読売』1956.11.4)という見出しの記事では、「東京へ行こうよ」というレコードが農村の少女の東京への「家出」を助長するとして、大きな批判を集めたことが記されている。このように、「家出娘」たちの「家出」は軽率でありつつも当時の風潮にそったものとして理解される傾向があり、記事では「家出娘」たちの「家出」を非難するよりも、「家出」による危険や悲惨な結末を指摘することに主眼が置かれていた。また、農村にある実家の貧困や、家族関係の不和も、多くの記事で「家出」の原因として挙げられていた。

2-2-2 1960年代における「蒸発」言説の出現

前項で見たように、1950年代の「失踪」に関する記事は、少年少女たちの地方から東京への「家出」に関する記事が大半であった。しかし、上記の「家出」に関する記事は1960年代半ば以降になると減少する。それに代わるようにして1960年代後半に登場するのが、「蒸発」の言説である。「蒸発」の概念は、1-3の先行研究でも述べられていたように、人が原因不明のまま突然姿を消すという事態を指している点で、従来の「家出」とは異なるものである。以下では、この時期に「蒸発」が雑誌記事でどのように語られ始めたのかを見ていくことにしよ

う。

1950年代始めより、しばしば原因不明の「失踪」を取り上げる記事が見られるようになるが、1960年代半ばから原因不明の「失踪」を「蒸発」と呼ぶ記事が出現する。「蒸発」を見出しとする記事が多く掲載されるのは1967年からである。この1967年は映画『人間蒸発』が公開された年であり、1967年の「蒸発」の記事の多くは『人間蒸発』を特集したものであった。『人間蒸発』とは、失踪した婚約者の足取りを追う実在の女性を撮影したとされる映画である。上記の記事では、映画のなかで描かれた「蒸発」の事例が詳細に取り上げられている。また、映画を主題としていない他の記事でも、記事の冒頭で『人間蒸発』に対する言及が行われるか、もしくは「人間蒸発」や「蒸発人間」といった言葉が頻繁に用いられている。以上より、当時「蒸発」が注目された契機の一つとして、この映画の存在があったことが分かる。

では、1967年時点で「蒸発」はどのように扱われていたのだろうか。1967年時点での記事では、「蒸発人間」という言葉が、最近の話題になっている（『週刊文春』1967.8.28）や「現代病ともなりつつある“人間蒸発”」（『新評』1967.3）といった記述が見られ、「蒸発」が注目され始めてからまだ間もないことが見て取れる。そして、新しい「蒸発」という問題を紹介するために、「九万六千人（年間）」や「推定二十万」といった「蒸発」の件数データや、原因が明瞭な「家出」との比較などの記述が多く見られる。そのような「蒸発」を紹介する記事で強調されているのは、「蒸発」の原因や実態が分からないという点である。例えば「蒸発」の全体像を把握しようとする記事には、「原因のトップ“動機不明”」（『週刊読売』1967.4.28）や「ミステリアスな蒸発事件」（『平

凡パンチ』1967.3.6）などの小見出しが付けられており、原因や実態が分からないこと自体が「蒸発」を説明する際の主題となっているのである。これらの記述から、1967年の「蒸発」の言説には新たに注目され始めた「蒸発」に対する驚きや不可解さが表れているといえる。また、「蒸発」の記事では主に成人の「失踪」が扱われており、この点も従来の少年少女の「家出」の言説とは異なる点であった。

2-2-3 1970年代の「家出」と「蒸発」の論点

では、主に1950年代に問題となっていた少年少女の「家出」と、1960年代に新たに見出された「蒸発」は、1970年代にはどのように扱われたのだろうか。

まず、1970年代の「蒸発」の言説について見てゆこう。1970年の雑誌記事に、「『蒸発』という言葉が、初めてマスコミに登場してからすでに久しい。最近では、あまたかぐらいにしか感じられなくなって来ている」（『現代』1970.8）という記述がある。これより、1960年代後半にマスメディア上に登場した「蒸発」は、数年の間に一般的に認知される事態となったことが見て取れる。実際に、1967年に見られたような「蒸発」の言説は新鮮味が無くなってしまったのか、1968年以降は「蒸発」に関する記事は減少傾向にある。しかし、1970年以降に「蒸発」を扱う記事は再び増加し始める。この点に関して、着目すべきは「主婦の蒸発」をめぐる論点である。先に引用した記事に、以下の記述がある。

その中でも、特に最近、主婦の蒸発が加速度的にふえ始めている。その原因も、昔と違って、亭主が酒乱だとか、グウタラだとか

いうのではなく、そんなことならひょっとするとウチの女房だってと心配になるほど、単純で、ありふれた動機なのである。(『現代』1970.8)

上記の「主婦の蒸発」をめぐる論点は、「蒸発」の言説の変遷を見る上では重要な意味を持っている。というのも、1971年以降の記事では夫婦のどちらかの「蒸発」を主題とした記事が頻出するようになるからである。特に、妻の「蒸発」を主題とした記事は多く、1971年以降の雑誌記事の見出しには「蒸発妻」という言葉が頻出するようになる。実際に1973年の時点で、「人妻の蒸発などさして珍しくないご時世」(『週刊新潮』1973.9.20)という記述があり、上記の論点が急速に一般化していったことが分かる。このように、夫婦関係における「蒸発」という新しい論点を中心として、「蒸発」を見出しとする記事は再び増加してゆくことになる。

また、上の記事では、「蒸発」の原因が「単純で、ありふれた動機」であると語られている。この点も、「蒸発」の原因や実態の不可解さを強調していた1967年の記事とは大きく異なっており、1970年代の記事では「蒸発」が分かりやすい文脈に乗せて語られることが多くなる。特に収集された記事の中では、夫婦関係の他に、仕事上の問題が「蒸発」の一般的な原因として語られていた。そのような記事の例としては、「蒸発サラリーマン1000人の人にはいえない動機 現状に負け組織脱出を願望する哀れな都会マン」(『アサヒ芸能』1972.3.30)や、「中堅社員を蒸発に追いこむ夜と昼の条件 いまやエリート、切れ者、人気者こそ現代病の予備軍だ！」(『アサヒ芸能』1972.9.7)といった見出しの記事を挙げることができる。見出しから

も分かるように、これらの記事では、原因が明らかであるかもしくは推測可能な「蒸発」が取り上げられ、究明された「真相」がスキャンダラスに語られている。

このように、1970年代における「蒸発」は、まるでその言葉の意味に反するように、具体的な文脈で語られるようになったといえる。1970年代には、本稿では収集の対象とはしなかったが、特定の「蒸発」事件を報道する雑誌記事も非常に多く書かれている。この「蒸発」の記事の流行は、上記の形式で夫婦関係を中心とした具体的な文脈で「蒸発」が語られた結果とみることができよう⁹。

また、「家出」の言説についても見ておこう。少年少女の「家出」の言説は1960年代にはあまり語られることはなかったが、1970年代になると「家出」を見出しとした記事が再び増加する。この時期には、少年少女の「家出」の記事の他に、成人の「失踪」や原因不明の「失踪」など、従来は「蒸発」と称されていた事態も「家出」として語られることがあった。このように、マスメディア上で用いられる「家出」と「蒸発」の概念は1970年代になると両者の区別が曖昧な状態で用いられるようになっていく。

この時期の少年少女の「家出」の言説では、「家出」は家庭環境や教育の荒廃による「非行」として扱われている。記事では目的がはっきりしない「家出」や異性交遊目的の「家出」の増加が指摘されることが多い。前者の例としては「“天気がよい”から家出する映像世代の理由なき反抗」(『アサヒ芸能』1978.9.28)、後者の例としては「同棲志願のこの危険な家出人たち」(『週刊朝日』1973.10.12)や「セックスに魅かれて、女子高生の家出が急増！」(『女性自身』1976.12.2)といった見出しの記事を挙げることができる。また、「家出を遊戯と思ういまの

子ども(『週刊朝日』1973.10.12)や「ここ数年、少年少女の家出の様相がガラッと変わってきている。いわく家出年令の低下、いわく家出される側の親のクールな反応、いわく遠距離家出型から近距離家出型への移行……。」(『週刊プレイボーイ』1977.4.26)など、1950年代の「家出」との違いを強調する記述も頻繁に見られる。この時点で、「家出」が少年少女たちの都市への憧れの結果として語られることはなくなったと見るべきであろう。このような当時の新しい「家出」に対して、記事では親の視点から何とか理解を試みようとして原因の分析が行われていた。

2-2-4 「蒸発」の原因はどのように語られたか

前項の分析で、当初は原因や実態が分からないものとして語られていた「蒸発」が、1970年以降はむしろ原因や実態が推測可能なものとして積極的に語られるようになったことが明らかになった。雑誌上で継続的に流行したのが後者の言説であったことを踏まえると、かつての「蒸発」の言説を詳細に理解するためには、そのようにして語られた原因や実態が何であったのかを見ていく必要があるだろう。そこで本項では、蒸発の原因がどのように語られていたのかを分析する。

まず、「蒸発」の原因や実態について語る記事は、「蒸発」を当人の意思によって起こったものとして扱う記事と、事件に巻き込まれるなど当人の意思によらずに起こったものとして扱う記事の二種類に分類することができる。本稿が収集した、「蒸発」を社会問題として捉える記事では、前者の記事の方が後者の記事よりも圧倒的に多かった。つまり、ほとんどの記事が「蒸発」を当人が自ら選択したものとして描い

ていたのである。

では、「蒸発」した者がなぜ「蒸発」することを選んだのか、その動機や背景はどのように語られていたのだろうか。ここでは特に、収集された記事の多数を占めていた夫婦関係を文脈とした「蒸発」を中心に見ていくことにしよう。先に述べたように、夫婦関係の文脈でも特に多く語られていたのは、妻の「蒸発」である。この「蒸発妻」の「蒸発」の動機として全ての記事で挙げられていたのは、夫婦生活への不満である。例えば、「妻の蒸発——逃亡にこめられた『男社会』への怨念」という見出しの記事には、以下の記述がある。

かくて、主婦の蒸発は今や“流行”のきざしさえみえるのである。警視庁の調べでは、その動機は「家庭不和」が圧倒的に多く、夫の頼りなさ、ギャンブル癖、女性関係、経済力のなさなどが原因となっている。次いで「異性関係」が多く、妻の蒸発の動機は、この二つでほぼ大半を占める。(『週刊サンケイ』1973.3.9)

上の記事で挙げられている妻の不満は、他の「蒸発妻」を取り上げる記事でも共通して挙げられていた。さらに、多くの記事では妻の「蒸発」の背後に「異性関係」が見出されていた。蒸発妻の「異性関係」が語られる記事には、妻が夫との「性の不一致」を受けて、代わりに別の親密な男性と性的関係を取り結ぶという事例が頻出する。「性の不一致で蒸発する妻が増えている」と題された記事に、以下の記述がある。

いまや、妻から離婚を申し立てるなんてもう古い。めんどくさい離婚手続きなんてマッピラと、夫も家庭も捨て、即充実した

セックスライフを求めての蒸発がふえているのだ。(『週刊現代』1974.10.17)

上の記事のように、週刊誌では現状に不満を持った妻の奔放な「蒸発」が非常に詳細に記述されていた。そのような「蒸発妻」たちの奔放な振る舞いは、基本的には「あまりにも現代的な社会問題」(『週刊平凡』1976.6.24)や「子捨て・子殺し“犯人”になる可能性が大だから始末に悪い(『アサヒ芸能』1974.10.17)」などとして否定的に評されているが、記事によっては「蒸発妻は男性支配への反乱者」(『週刊朝日』1974.10.25)や「忍従と耐乏が美德としてあがめられた過去を清算して、今、女はあてどない旅に出る。(中略)それは閉鎖された空間のなかで見つけた唯一の救いなのかもしれない。」(『週刊サンケイ』1973.3.9)などと評され、一定の理解も示されていた。妻たちが「蒸発」することで得る自由は、当時の「蒸発」の言説では両義的なものとして捉えられていたといえるだろう。

次に、「蒸発」される側の夫の表象についても確認しておこう。1970年代以降に夫婦関係における「蒸発」が扱われるようになると、「蒸発されやすい夫」の性格上の特徴を語る言説が出現する。「団地妻の蒸発続出！安定した家庭は妻の墓場か」と題された記事に、以下の記述がある。

妻に去られる夫には典型的なタイプがあるという。マジメ、無趣味、おとなしく内向的で仕事一途。家庭では、よきマイホームパパ。考えてみれば、サラリーマンには最もありふれたタイプではないか。(『週刊朝日』1974.10.25)

上の記述では、「マジメ、無趣味、おとなしく内向的で仕事一途」が、蒸発される夫の「典型的なタイプであるとされている。また、他の記事では「最近、意外とマジメな夫が多い！夜も決まった時間にきちんと帰ってくるような。マジメな亭主はつまらない、ということか、ゼイタクな！」(『週刊朝日』1976.6.24)や「時計の振り子のように家と会社を往復。真面目人間だった夫なのに」(『週刊女性』1975.3.11)といった記述も見られた。これらの記述に共通しているのは、特に仕事に対して「マジメ」であるという点であろう。以上の言説からは、妻の「蒸発」が特に落ち度のない一般的な夫にも起こりうるということに対する不安を読み取ることができる。さらに、ここで再び「蒸発妻」の側に視点を移すと、「蒸発妻」の不満の対象として語られているのは、夫との関係の安定性でもあったということが分かる。先に見た「蒸発妻」の奔放な振る舞いの記述は、このような安定した夫の表象とは対照をなすものであったといえよう。また、仕事に対して「マジメ」な夫への不満が語られる記事の場合、その家庭は「中流」以上のものとして、つまりある程度の収入があるものとして語られている。先に挙げた記事では、夫の経済力のなさが「蒸発」の原因の一つとして語られていたが、実際に多くの記事で語られていたのは、むしろ経済的に余裕のある妻たちの「蒸発」であった。

なお、夫婦関係を文脈とした「蒸発」が語られていたのは、妻だけではない。「蒸発妻」の記事に比べると件数は少ないが、夫の「蒸発」を主題とした記事も存在している。「男が蒸発したくなる時」と題された記事には、以下の記述がある。

会社では仕事にゆきづまりを感じ、家に帰

れば口うるさい女房に悩まされたり、妻と姑の板ばさみになったり——そんなとき、ふと“蒸発”ということばが頭をよぎる。たいがいの男はこんな経験があるようです。（『週刊女性』1978.6.6）

夫の「蒸発」の動機についての記述が、「蒸発妻」の場合と異なるのは、上の記事のように夫婦関係の不満と共に仕事上の問題が語られているという点にある。では、仕事上の問題による「蒸発」は、どのように語られていたのだろうか。1972年の以下の記事では、誰もが「蒸発願望」を持ちうるとされ、その一般性が強調されている。

現代サラリーマンは残酷物語の主人公として登場する。働けど働けど……というヤツで、定年をむかえても“恍惚の人”になるのがオチのご時勢である。だれしも、蒸発願望にふと、つき動かされることがあるだろう。（『アサヒ芸能』1972.9.7）

上の記事のように、仕事の問題による「蒸発」は、夫婦関係による「蒸発」よりも、「蒸発する者」に対して同情的な視点で語られていた。「蒸発」の原因となっている「残酷物語」には、若い社員の場合は出世競争による敗北が、中間管理職の場合は「上と下との板バサミ」が挙げられている。この定年まで継続する人間関係のストレスからの逃避として、「蒸発」は語られていた。また別の記事では、「蒸発」にいたる「サラリーマン」が、「現状に負け組織脱出を願望する哀れな都会マン」（『アサヒ芸能』1972.3.30）と評されている。このように当時の一般的な窮状からの逃避として捉えられた「サラリーマン」の「蒸発」は、奔放な行動が

主題となっていた「蒸発妻」とはかなり異なる語られ方をしていたといえよう。

本項では、1970年代に盛んに語られた「蒸発」の原因や実態についての言説を見てきた。ところで、「蒸発する者」たちの「蒸発後」はどのように語られていたのだろうか。最後にこの点について確認しておきたい。「蒸発した者」が帰ってこない場合、「その後」は記事の執筆者によって推測されるしかなく、「蒸発」の原因や実態と関連させる形でその顛末が語られている。「蒸発妻」の場合は、当初は夫以外の新しい男性と恋愛関係になるものの、その後は新しい男性との関係が悪化したり、生活のために「水商売」に行きつくなどの展開が多く語られており、「蒸発」の結末は悲観視されることが多かった。また、サラリーマンの「蒸発」も、「一種のサラリーマン的自殺行為」（『アサヒ芸能』1972.9.7）と形容され、その後の社会復帰の困難さが語られていた。ただし、「蒸発した者」は必ずしも永遠に帰ってこないものと捉えられていたわけではなく、数日間の短期間の「蒸発」を事例とする記事や、「蒸発」した者が帰還する場面を記述した記事も多くあった。

2-2-5 1980年代の「家出」と「蒸発」の言説

さて、最後に本項では、これまで見てきた少年少女の「家出」と成人の「蒸発」の言説が、1980年代にどのように語られたのかを確認しておく。

まず、少年少女の「家出」を社会問題として扱う雑誌記事は、1980年代にはほとんど見られなくなる。「おじさん新聞 僕らの“トム・ソーヤー”体験 家出の思い出」（『週刊宝石』1989.9.28）と題された記事は、30代半ばから50代の男女が、自らの「家出」の体験を回顧

するという構成になっている。以上の「家出」に対する雑誌での扱いから、1980年代には少女少女が「失踪」する事態には注目が集まらなかったことが分かる。

次に、「蒸発」の雑誌記事については、1980年代前半まで夫婦関係による「蒸発」を問題として取り上げる記事が見られる。この時期になると、「私はモーニングショーの蒸発番組で500組ほどの、夫婦のいさかい、別離、憎しみ合いを骨の髄まで見てきた」(『婦人公論』1983.10)という執筆者が書いた記事が出現するなど、以前の「蒸発」の問題を回顧する視点が見られる。そして1980年代半ばになると、夫婦関係による「蒸発」を扱った記事は見られなくなり、また「蒸発」という言葉が原因不明の「失踪」や「行方不明」に対して用いられる頻度も減少する。以上より、1970年代に雑誌を賑わした「蒸発」の言説は、1980年代後半には収束に向かっていただけに見えることができる。

3 考察

3-1 「家出娘」から「蒸発妻」へ

ここで、前章の雑誌記事の分析によって明らかになった点を整理しておきたい。本稿で収集した「失踪」に関する雑誌記事で、最初に焦点が当てられていたのは少女少女の地方から東京への「家出」であった。1950年代に頻出した「家出」の記事の多くは、上野駅の「家出娘」を主題とした記事であり、少女たちが東京への憧れと農村での家族生活に対する不満から、就業目的で家を離れるという過程が語られていた。1960年代半ばになるとこれらの記事は減少するが、代わりに今度は成人の「蒸発」を主題とした記事が出現する。この「蒸発」は、当初は文字通り原因や実態が分からないものとして語

られていたが、1970年代になるとその原因や実態がむしろ積極的に語られるようになった。前節で詳細に見た通り、「蒸発」は夫婦関係に対するありふれた不満から起こりうるものとされ、特に夫との関係に不満を抱く「蒸発妻」が、「蒸発」して別の異性と関係を持つという内容が盛んに語られた。そして、1980年代になると、1970年代の「蒸発」の言説の流行は収束に向かっていった。

さて、本稿の目的は失踪の言説の変遷を通して、個人が家族や共同体から離脱することがどのような意味を持っていたのかを明らかにすることであった。上記の整理からも明らかのように、同じように家族や共同体から人が消え去る「失踪」という事態を扱った記事でも、1950年代の少女少女の農村から東京への「家出」を扱った記事と、1970年代の成人の「蒸発」の記事では、その離脱の意味は全く異なるものとして語られていた。つまり、前者の言説における「失踪」が農村の閉塞的で貧しい生活からの自由を得ることを意味していたのに対して、後者の「失踪」では主に不満のある夫婦関係からの自由を意味していた。特に「蒸発妻」の場合には、仮に経済的に裕福であっても、夫との安定した関係から抜け出すことが「蒸発」の意図として語られることがあった。「蒸発妻」の言説において「失踪」される夫の大部分は社員であったことも踏まえると、むしろ1950年代の「家出」の言説の中で志向されていた生活が、1970年代の「蒸発」の言説では不満の対象とされているともいえるだろう。

3-2 戦後の家族史と「失踪」の言説の変遷

上記の「失踪」の表象の変化は、どのような親密圏の変容に基づいて生じていたのだろうか。この点について考察するために、ここでは

落合恵美子(2004)が「家族の戦後体制」と呼ぶ戦後の標準的な家族モデルの成立と、その揺らぎの過程を参照することにしたい。落合によれば、「戦後の家族体制」における標準的な家族は、「女性の主婦化」と「再生産平等主義」——「みんなが適齢期に結婚し、子どもが二、三人いる家族を作る」(落合 2004: 101)——、そして「人口学的移行期世代が担い手」という三点を特徴としている。人口学的移行期世代とは、多産少死のために人口増加が起こった1925年から1950年にかけて生まれた世代である。落合によれば、この人口学的移行期世代は、地方の家から都市に出て核家族を作ること、戦後の家族体制の担い手となるとともに、核家族世帯の増加の要因となっている。この人口学的移行期世代が戦後に地方から都市に移動した時期と、農村から東京への「家出」の記事が頻出した時期が重なっている点は、注目に値する。実際に、2-2-1で取り上げた雑誌記事には、当時の世間やマスメディアに農村から都市への移動を理想化する風潮があったことが記されていた。少年少女の都会への憧れと、その悲惨な結末を語る「家出」の記事は、そのような当時の家族の動向を反映すると同時に、そのネガティブな側面を表象したものであったと捉えることができる。

では、「蒸発」の言説が流行した1970年代に関してはどうだろうか。落合によれば、それまで安定してきた「戦後の家族体制」は、1970年代になると揺らぎ始めるといふ。同様の指摘は山田昌弘(2005)によってもなされており、家族に関するいくつかの統計的な指標が転換点を迎える——専業主婦数の減少が始まり、平均初婚年齢や離婚率が上昇を始める——1975年頃を境に、「戦後家族モデル」が修正を迫られるようになったことが述べられてい

る。落合は、この1970年代以降の家族の変化が先駆的に現れた社会運動として、「ウーマンリブ」を挙げている。ウーマンリブは「女に忠実になる」という理念の下に、既存の体制を支える家族制度の否定へと向かい、その結果として1970年代には多くの「家族解体」や「家族実験」の言説が生まれたという。妻が「蒸発」するまでの奔放な振る舞いを描き、ときにはそれを「男性支配への反乱」と形容した「蒸発妻」の言説が、同時代の「家族解体」の言説の影響を受けていたことは明らかであろう。また、「蒸発妻」たちの「蒸発」の原因の記述では、姑との不仲よりも夫への不満が圧倒的に多く語られていた。よって、「蒸発妻」の言説では、嫁姑の不仲など従来の拡大家族に関する論点はあまり問題にはなっていないということが分かる。これらの点から、1970年代の「蒸発」の言説は、家制度や村落といった戦前から存在した紐帯からの自由ではなく、戦後に成立した新しい家族体制からの自由を先駆的に志向するものであったといえるだろう。

3-3 親密圏の変容と「蒸発」の言説

では、前節までに見てきた「失踪」言説の変遷は、「個人化」による親密圏の変容過程とどのように関わっているのだろうか。まず、1950年代における農村部の少年少女たちの東京に対する憧れの言説は、戦前の紐帯からの解放を肯定的に捉えており、当時の「個人化」を歓迎する言説であったといえる。少年少女の「家出」も、彼／彼女たちが所属していた農村や家といった戦前の紐帯から離脱し、都市での自由な生活を目指す行為として語られていた。ただし、当時の「家出」の言説は、彼／彼女たちの「家出」の成功事例を語るものではなく、むしろその悲惨な結末を問題として語るものであったこ

とに注意しておくべきであろう。1950年代に盛んに語られた「家出娘」の悲惨な結末は、安易に自由を歓迎する言説に対して警鐘を鳴らすものであった。

それと比較すると、1970年代に語られた「蒸発妻」を取り巻く環境は、相対的にかなり自由なものとなっている。そのような自由な環境で企図される「蒸発」は、かつて解放が志向された既存の紐帯ではなく、戦後に成立した新しい家族からの自由を志向するものとして語られていた¹⁰。ベックら (Beck and Beck-Gernsheim 2002) は、既存の紐帯からの解放がなされる「第一の近代」と、「第一の近代」からの解放の後に形成された家族や中間集団にまで「個人化」の波が及ぶ「第二の近代」を区別し、現代を「第二の近代」として位置付けている。戦後に成立した新しい家族体制からの自由を志向する1970年代の「蒸発」の言説は、「第二の近代」の段階における「個人化」を肯定的に捉える側面があったといえるだろう。

ここで、「蒸発」の言説が新しい家族からの自由と結婚外の恋愛を合わせて扱うことが多かったという点に、再び着目しておきたい。というのも、「蒸発妻」が家族から離脱した後に結婚外の恋愛を行うという展開は、戦後に成立した新しい家族体制からの逃避先として、血縁関係や婚姻関係に基づく家族とは異なる親密圏が語られていたということを示すものだからである。2-2-4で見たように、「蒸発妻」たちの恋愛の相手は、みな「蒸発妻」たちの夫に対する不満——関係の安定性や、性的な相性の不一致など——を一時的には埋めることができる存在として語られていた。また、上の条件を満たす「蒸発妻」の恋愛の相手としては、大幅に年下の男性や、同性のレズビアン女性など一般的には夫婦となるのが難しい相手が挙げられ

ることも多かった。以上のように語られた「蒸発妻」の恋愛関係は、夫婦関係よりも互いのコミットメントによる関係が優先されているという点で、ギデنز (Giddens 1992 = 1995) が「純粋な関係」における愛のあり方として指摘した「コンフルエント・ラブ」に当てはまるものであるといえる¹¹。「蒸発妻」の言説からは、そのような選択的な人間関係へのコミットメントと、それにとまなう非家族的な親密圏の拡大の兆候を見出すことができる。

しかし、2-2-4で確認したように、「蒸発妻」のその後は悲観的に語られる傾向があった。「蒸発」の言説では、上記のように「蒸発」の結果として選択された親密圏が、生の基盤としては脆弱なものであるということがすでに語られていたのである。以上の図式は、本稿の冒頭で確認した、選択的な人間関係の孕むリスクに対する不安の言説と同型のものであるといえよう。家族からの自由をスキャンダラスに語る「蒸発」の言説には、「蒸発」の言説以降の「個人化」による親密圏の変容に対する不安の構図がすでに内在していたのである。

その一方で、「蒸発」の言説からは、「個人化」がその時点では徹底されてはいなかったことも読み取れる。最後に、この点について考察しておこう。まず、「蒸発妻」の言説が流行したのは主に1970年代であったが、落合 (2004) や山田 (2005) が指摘するように、1980年代にはより日常的に生じる結婚外の恋愛について語る「不倫」の言説が流行することになる。ドラマ「金曜日の妻たちへ」で典型的に見られるような1980年代の不倫の言説は、経済的に豊かな妻が、夫の立場からは理解が困難な理由で不倫に至るなど、「蒸発妻」の不倫の言説と一致するところも多い。ただし、二つの言説が大きく異なるのは、不倫の言説では婚姻関係を維

持したまま結婚外の恋愛を行われるのに対して、「蒸発妻」の言説では不倫に際して妻が家族の元から消え去ってしまうという点である。二つの言説における結婚外の恋愛の位置付けを比較すると、結婚外の恋愛に「失踪」がともなっている「蒸発」の言説の時点の方が、結婚外の恋愛の敷居は高く扱われていたとみなすべきであろう。

また、安定した家族から消え去ってしまう「蒸発」は、結婚外の恋愛を行う方法としては、必ずしも合理的なものであるとはいえない。実際に、「蒸発」の言説でも「蒸発」のその後が悲観的に語られる傾向があったことはこれまで述べてきた通りである。この点に関して、「蒸発妻」の言説ではしばしば「蒸発」と離婚は比較して語られている。そのような記事では、「離婚よりもっと早い」（『週刊現代』1974.10.17）や「一見マジメな夫は、離婚になど絶対に応じてくれない」（『週刊平凡』1976.6.24）、「離婚はおろか蒸発する勇気もないわたし」（『婦人公論』1980.1）といったように、離婚を「蒸発」よりもむしろ困難なものとして扱う記述があった¹²。これらの記述から、一度結婚した夫との婚姻関係を解消することが——場合によってはリスクの大きな「蒸発」と比較されるほど——この時点では困難なものとして捉えられていたといえる。

以上のような「蒸発」の言説における結婚外の恋愛や離婚に対する位置付けから、戦後に成立した新しい家族体制とそれを支える夫婦関係が、「蒸発」の言説の時点では依然として安定したものとしても捉えられていたことが分かる。「蒸発」は、親密圏により徹底した「個人化」の兆候が現れはじめた段階で流行した、過渡的

な時代の言説だったのである。

4 おわりに

本稿では、1950年代から1980年代までの「失踪」に関する雑誌記事の言説を分析することで、個人が家族や共同体から離脱することがかつてどのような意味を有していたのか、またその際に志向されていた自由とは何だったのかを考察してきた。その結果、1950年代には少年少女の農村から東京への「家出」が、1970年代には成人の「蒸発」が、それぞれの時期の「失踪」の主要な論点として語られていたことが分かった。前者の言説では農村の閉塞的で貧しい生活からの自由を得ることが、後者の言説では新しい家族からの自由を得ることが「失踪」の目的として語られていた。

以上の「失踪」の言説の変容を、「個人化」に対する言説の歴史の一部として捉えることができるとしたら、次の点が示唆されよう。日本の「個人化」を肯定する言説は、戦後から高度経済成長期の間に一貫して存在していたのではなく、二段階に分かれて生じていたのではないか。つまり、まずは戦前の家制度や村落に代表されるような既存の紐帯からの解放が肯定される。その後、今度は最初の解放によって形成された紐帯からの自由が志向されるという過程があったのではないだろうか。

なお、1980年代半ばになると「蒸発」の言説の流行は収束に向かっていた。本稿では記事の収集対象とはしなかったが、1990年代以降も、「蒸発」の言説のように家族や共同体から自らの意思で消え去る個人について積極的に語る言説が流行していた様子は見られない¹³。このように語られなくなった「蒸発」の言説は、近年さかんに語られるようになった、家族や共

同体からの受動的な排除を危惧する言説とはまさに対照をなすものであるといえよう。以上の言説上の変化が、「蒸発」の言説にすでに兆候が現れていた「個人化」の徹底によってのみ起こったのか、それとも何か別の要因があったのかを分析することは、「個人化」の言説史を記述する上での今後の課題となるだろう。

注

¹ 「無縁社会」の言説の内容の詳細については、NHK「無縁社会プロジェクト」取材班（2010）を参照のこと。

² 前者の研究としては、例えば「孤独死」の言説の変遷を追った青柳涼子（2008）や小辻寿規・小林宗之（2011）および堀崇樹（2012）を挙げることができる。また、石田（2011）と島田（2011）は後者の言説についても扱っているが、特定の概念や言説の変遷に焦点を当てた研究は行っていない。

³ ただし、自然災害によって生じたことが明白である行方不明者は、本稿における「失踪」の概念には含まないことにする。

⁴ 柳田国男（1976）をはじめとした民俗学の研究によって、近世以前の「失踪」の記録が「神隠し」として伝承されていることが明らかにされている。

⁵ 本稿における「失踪」の概念は、「家出」のように能動的に家族から離脱する行為だけではなく、何らかの事件に巻き込まれるなどして本人の意思によらず家族や共同体の元から離脱してしまう事態も指し示すものである。

⁶ 本稿における「失踪」の概念は、「蒸発」のように残された家族にとって原因が不明である事態のみを指すわけではない。また、2章以降で詳述するように、実際にマスメディアで用いられる「蒸発」の概念には、ここで見たよりも多様な意味が付与されていた。

⁷ 他の「失踪」に関するまとまった言説が見られ

るメディアとしては、新聞や「失踪」に関して当時発売された書籍、そして後述する「失踪」について扱うテレビ番組や映画を挙げることができる。ただし、当時の「失踪」に関する書籍やテレビ番組の種類は限られており、それらのメディアから分析に必要な分量の言説を収集することは不可能である。また、新聞からは多くの言説が収集できるものの、その内容は「失踪」の事件報道の記事に偏っているため、そこから当時「失踪」に対して付与された多様な意味を分析することは困難である。上記の理由から、本稿では言説を収集・分析するメディアとして雑誌記事を選択した。

⁸ 上記の条件で記事の収集対象となった雑誌は、『文藝春秋』、『週刊新潮』、『週刊東京』、『週刊サンケイ』、『週刊現代』、『週刊文春』、『新評』、『平凡パンチ』、『週刊読売』、『サンデー毎日』、『現代』、『主婦と生活』、『アサヒ芸能』、『現代の眼』、『婦人公論』、『週刊朝日』、『週刊女性』、『女性セブン』、『潮』、『素敵なお女性』、『少年補導』、『リーダーズ・ダイジェスト』、『地上』、『婦人朝日』、『中央公論』、『キング』、『週刊大衆』、『朝日ジャーナル』、『週刊明星』、『日本』、『毎日グラフ』、『微笑』、『警察時報』、『女性自身』、『プレイボーイ』、『週刊ポスト』、『FRIDAY』、『SAPIO』であり、男性誌から女性誌まで多岐に渡っていた。

⁹ 1970年代の雑誌記事には、「蒸発する者」を捜索するテレビ番組内の企画に言及する記事が多く見られる。そのような企画が放送されていた番組として、雑誌記事で言及されていたのは、フジテレビ「小川宏ショー」、TBS テレビ「奥さま八時半です」、テレビ朝日「モーニングショー」で第二金曜日に放送していた「人間蒸発」であった。特に「モーニングショー」内の「人間蒸発」の影響力は大きく、番組内で取り上げられた「蒸発」を主題とする雑誌記事が数件あった。以上より、1970年代の「蒸発」言説の流行には、上記のテレビ番組が大きく寄与していたであろうことが推測される。

¹⁰ 同様にサラリーマンの「蒸発」も、戦後に成立した新しい家族体制を支えてきた男性の「サラリーマン」としての生活からの離脱が図られていた。

¹¹ 戦後の結婚言説の変容を分析した桶川泰（2010）は、「家族の戦後体制」におけるロマンティック・ラブの理念に代わるものとして、1970年代に夫婦間のコミュニケーション・コミットメントによる親密性を志向する言説が出現してくることを指摘している。安定した夫婦関係に対する不満から、別の異性との関係を取り結ぶという「蒸発」の言説は、夫婦間におけるコミットメントの重要性の高まりの裏返しでもあったといえるだろう。

¹² 離婚が困難な理由としては、記事では夫の反対に対する不安や恐れが挙げられていた。この理由からも、当時の夫婦関係が依然として相対的に強い拘束力を持つものとして捉えられる場合があったことが読み取れる。

¹³ 一時的な「家出」に関する言説であれば、1990年代以降にも流行が見られる。例としては、「プチ家出」に関する言説を挙げることができる。また、「ネットカフェ難民」の言説は長期的な「失踪」として語られることもあるが、「蒸発」の言説のように、「失踪」に対して積極的な意味が付与される風潮は見られなかった。

文献

- 網野善彦, 1978, 『無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』平凡社。
- 青柳涼子, 2008, 「孤独死の社会的背景」中沢卓実・淑徳大学孤独死研究会編『団地と孤独死』中央法規出版, 79-103.
- Beck, Ulrich and Elisabeth Beck-Gernsheim, 2002, *Individualization: Institutionalized Individualism and Its Social and Political Consequences*, London: Sage.
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity Press. (= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダンティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- , 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Cambridge: Polity Press. (= 1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』而立書房.)
- 堀崇樹, 2012, 「新聞報道にみる孤独死の動向と問題の所在」『社会学論叢』173: 41-60.
- 星野周弘, 1973, 「蒸発」岩井弘融編『社会学講座 16 社会病理学』東京大学出版会, 155-64.
- 井上忠司, 1978, 「家出・蒸発」那須宗一・大橋薫・四方寿雄・光川晴之編『家族病理学講座 第三巻 家族病理と逸脱行動』誠信書房, 21-38.
- 石田光則, 2011, 『孤立の社会学——無縁社会の処方箋』勁草書房。
- 警察庁生活安全局生活安全企画課, 2012, 「平成23年中における行方不明者の状況」, 警察庁ホームページ, (2013年1月13日取得, <http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/H23yukuehumeisha.pdf>).
- 小辻寿規・小林宗之, 2011, 「孤独死報道の歴史」『Core Ethics』7: 121-30.
- NHK「無縁社会プロジェクト」取材班, 2010, 『無縁社会——“無縁死”三万二千人の衝撃』文藝春秋。
- 桶川泰, 2010, 「現代日本社会における『近代家族の揺らぎ』と親密性の変容——『婦人公論』における独身・

非婚をめぐる言説から』『フォーラム現代社会学』9: 88-100.

落合恵美子, 2004, 『21世紀家族へ(第3版)——家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣.

斉藤純一, 2000, 『公共性』岩波書店.

島田裕巳, 2011, 『人はひとりで死ぬ——「無縁社会」を生きるために』NHK出版.

山田昌弘, 2005, 『迷走する家族——戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣.

柳田国男, 1976, 「遠野物語」『遠野物語・山の人生』岩波書店, 5-84.

米川茂信, 1978, 「家出・蒸発」大橋薫・望月嵩・宝月誠編『社会病理学入門』学文社, 99-111.

【付記】本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

(なかもり ひろき、京都大学大学院人間・環境学研究科、h_nakamori1225@yahoo.co.jp)

(査読者、青山薫、平田知久)

Representations of Disappearance from the 1950s to the 1980s and Transformation of the Intimate Sphere:

An Analysis of Magazine Articles on “Runaway” and “Evaporation”

NAKAMORI, Hiroki

This paper aims to clarify how the problem of “disappearance” has been addressed from post-war times to the high economic period of growth. In this paper, “disappearance” is defined as a situation where “a person vanishes from his or her family or community and stays missing over the long term.” The purpose is to examine the transformation of discourse to a positive view of liberation from existing ties. In order to answer the research question, I collected magazine articles from the 1950s to the 1980s on “disappearance,” with the aim of analyzing their discourse.

The analysis shows that discourse of “disappearance” in the 1950s focused on “runaway” boys and girls who moved from agricultural areas to cities, and that in the 1970s focused on the “evaporation” of adults. These were the major topics on “disappearance” in the above-mentioned periods. In the 1950s discourse, freedom from the poverty-stricken and reclusive life in agricultural communities was given as the reason for “disappearance.” On the other hand, in the discourse of the 1970s, the aspiration for “evaporation” can be considered as freedom from the new family framework, which had been constructed after World War II.